

## 学術情報へのアクセス向上を目指して—機関リポジトリのいま

### マレーシア・シンガポール—機関リポジトリ動向

東川 繁

マレーシアとシンガポールは地理的・歴史的な関係もあつてか、隣国で実施されている事業に関して相互に意識しあうことが少なくない。機関リポジトリについてはどうであろうか。ここでは両国の機関リポジトリについて簡単な紹介を行うとともに、その共通点・相違点をいくつか探ってみよう。

#### ●マレーシアの機関リポジトリ

マレーシアでは次の五リポジトリが構築されている。マラヤ大学の歴史文書リポジトリを除き、いずれもEPrintsという同じソフトウェアで構築されているため、画面構成が似ている。一つのリポジトリから他のリポジトリに移るときにはほとんど違和感がない。

①マラヤ大学 (<http://eprints.um.edu.my/>) (<http://mymanuskrip.fsktm.um.edu.my/>)

同大学では二種類のリポジトリを運営している。一つは論文等をフルテキストで提供するものである。同大学教員が国際会議

やワークショップに提出した論文が中心であるが、遺物の映像資料などもある。収録件数は現在六〇件程度と少ない。今後の努力が望まれるところである。もう一つは同大学図書館、国立図書館、国立公文書館等国内の諸機関が所蔵する手書きの歴史文書を画像で提供するものである。大半はジャウィと呼ばれるアラビア文字を使用したマレー語で書かれている。現在八七文書を収録している。

②マレーシア工業大学 (<http://eprints.ium.my/>)

同大学教員の論文、報告書、大学院生の学位論文等を中心に提供する。理工学系の内容が大半であるが、同大学には文科系の学部・学科もあるので、人文・社会科学に関する論文等も少なくない。収録件数は五五〇〇件程度。フルテキストが得られるコンテンツが多いが、全体の何割かはそうでない。このような場合、PDFファイルを利用したい理由とメールアドレスを管理者に連絡すれば許可してくれる場合がある。

③マレーシア国民大学 (<http://eprints.ukm.my/>)

他大学と同様、自校の教員の論文、報告書を中心に提供する。分野は多岐にわたる。収録件数は現在二〇〇件程度。件数は他大に比較するとまだかなり少ないが、すべてがPDFファイル化されており、またそのほとんどがオープンアクセスになっている。登録者のみが利用できる制限つきアクセスとなっているものはごく一部で、公開度が高いリポジトリといえることができるであろう。

④マレーシア北大学 (<http://eprints.nun.edu.my/>)

収録件数は現在一八〇〇件程度。本学も総合大学であるため、分野は多岐にわたる。コンテンツのすべてがオープンアクセスになっている。学位論文の件数が多いのが特徴の一つである。修士論文が大半であるが、博士論文も少なくない。

#### ●シンガポールの機関リポジトリ

シンガポールでは次の三大学が機関リポ

ジトリを構築している。これらのうち、シンガポール国立大学と南洋工科大学がDSpaceという共通のソフトウェアを利用しており、画面構成等が近似している。

①シンガポール国立大学 (<http://dl.comp.nus.edu.sg/>)

同大学のコンピュータ学科が主催するウェブページで提供されている。コンテンツは大きく二つに分かれる。一つは同大学図書館のコレクションに属するもので、同図書館が構築したデータベース、シンガポールの歴史に関する文書類などからなり、PRDLAと名づけられている。もう一つは同学科の教員、大学院生、学部生の論文・報告書、学位論文等である。

前者の収録件数は十数件で、件数自体はそれほど多くない。戦前の日本語の資料もある。現在オープンアクセスになっているものはこのうちの二点のみである。一点はシンガポール国立大学図書館のニュースレターで、年に数回発行されるものだが、一九九五年以降のものをみることができ、もう一点は『新国民日報』という古い新聞で、一九一九年から一九三三年まで収録されている。マイクロフィルム化されていたものをPDFファイルで提供している。後者の収録件数は現在二八〇〇件程度。形式はすべてPDFファイル。技術報告書はかなりの部分がオープンアクセスとなっているが、学位論文をはじめとしてそれ以

外のコンテンツはアクセスが制限されている。

②南洋工科大学 (<http://dr.ntu.edu.sg/>)

オープンアクセス部分と制限つきアクセス部分とに分かれている。雑誌論文と学術会議等提出ペーパーがオープンアクセスになっている。収録件数は現在三六〇〇件程度。すべてPDFファイル形式である。残念ながら現時点では特定の学科・研究所の成果に限られているが、今後拡大されていくものと思われる。制限つきアクセス部分は同学科の教員、大学院生、学部生の論文・報告書、学位論文、試験問題等を収録するアクセスにユーザー名とパスワードの入力が必要な以外は、オープンアクセス部分と大きな相違はない。

③シンガポール経営大学 (<http://ir.library.smu.edu.sg/>)

学内諸学科、学内研究所・センターの成果である雑誌論文、ワーキングペーパー、学術会議ペーパー、報告書等を収める。しかし、テキスト全文が掲載されているものはごくわずかで、書誌情報のみのものがほとんどである。収録件数は現在八五〇〇件程度。件数は多いが、その活用方法は限定されてくるであろう。現時点ではリポジトリとしての有用性はそれほど高くないといわざるを得ない。

## ●共通点と相違点

両国のリポジトリにおける共通点として、自然科学、情報技術、企業経営など、時代の最先端を行く分野の最新の研究成果を取り入れようとしていることがまず指摘できるであろう。この点はこのにあげた各大学に共通しているといえる。ただ、この点むしろ世界共通の傾向といえるかもしれない。その一方において、同時にいわゆるデジタルアーカイブの機能を組み入れようとしているところがあげられる。これは特に図書館が主体となって実施しているものである。自国の歴史的、文化的な成果を普及させたいという意図によるものと思われる。マラヤ大学とシンガポール国立大学という両国で最も歴史のある大学がこの点に力を入れているのは、そのような自負に基づくのではないかと思う。

相違点としては、シンガポールでは歴史的資料を除けば英語コンテンツのみであるのに対し、マレーシアではマレー語のものがかなり含まれていることである。これは歴史的経緯、言語事情に起因するものである。

なお、あくまで現時点での総体的な比較ではあるが、オープンアクセスの観点からすればマレーシアのほうが公開性は高いといえそうである。

(ひがしかわ しげる／アジア経済研究所図書館)